



UMEMOVIE
DIGITAL BOOKS

UMEMOVIE Digital Books Vol.1

8月17日、小林一樹はいつも通りの生活を送っていた。

一樹はいたってその辺にいるような中学3年生。1学期の期末テストでは、クラストップという位置でもなく、かといってクラス最下位という位置でもなかった。しいて言えば、クラスの最下位から半分以上の位置だっただろうか。

そんな一樹には幼稚園のころから幼馴染みの友人が2人いた。残念ながら3人はクラスはバラバラだったが、暇があれば3人でどっか行って遊んだりしている。

幼馴染みの1人である小川奈美は、クラスで最も成績が良く、スポーツも好成績。さらに中学に入学していきなり告白されたという美少女だ。

そして、もう1人の友人今野龍一は、これまた成績が良くて、スポーツも好成績で、ちょ〜〜〜イケメンという、女子にとってはたまらない男である。

そんな2人と違って自分は成績は普通だし、スポーツもそこそこ出来るけどだし、顔も・・・まあ普通(自分で言うのもなんだが)な方。という、ん〜〜、簡単に言うと普通な人間ということだ。

まあ、そんなことは置いといて。

夏休みが始まってから1ヶ月ほど過ぎた。民放はどこも

夏休みスペシャルをやっている。オレはその夏休みスペシャルを見ていた。

「宿題終わったの〜？」

オレの母、奈保美だ。

夏休みが始まってからいつもこの言葉である。

「あ〜？」

オレは呆れた感じで言った

「あら、その感じは終わってないね〜？」

「分かったよ。やればいいんだろ。」

オレは、テレビが置いてあるリビングから離れ、階段を上がってすぐ右の、自分の部屋に行った。オレはしぶしぶ机に向かい、テキストを出した。シャーペンを出し、宿題をやりようとした。その時、ふと目の前にあるカレンダーに目がいった。

カレンダーを見ると、8月23日の所に「夏祭り」と書いてある。

「あ〜今年もあるんだよなあ〜」

オレの住んでいる町の祭りは毎年8月下旬に行われている。自分たちにとってはこの夏祭りで夏休みを終える、

というような行事だ。

この祭りでは一昨年まで毎年、花火大会が行われていたのだが、昨年からは花火大会が無くなってしまったのである。噂では、「お金が無かったから」という説がある。

だが、花火大会は、「大会」というほどの物ではなく、

市販されている花火で行われるので、そこそこすごくはない。なので、花火大会がなくなっても、自分的には「がっかり」などと思うことは無かった。

「今年も行こうかな」

だが、誰と行こうか。ふと机に向かい悩むと、一枚の写真が目に入った。それは、小学校卒業時に小

川奈美と今野龍一と一緒に撮った写真だ。

「ああ、懐かしっ！」

そう言ったとたん、ふと思いついた。

「こいつらと一緒にいこうかな」

そう言い、机の上にあるケータイを手に取り、奈美と龍一に一斉送信で次のようなメールを送信した。

「よお！久しぶり！！あのさあ、今度の8月23日に夏祭りあるじゃん。あのさ、もし都合が無かったら一緒に行かぬ？返信ヨローーーーー」

送信が完了し、返信を待った。すると、

ケータイが鳴った。奈美からだ。

「OK!集合時間何時？」

文の最後には、質問のようなジェスチャーをしたかわいい絵文字があった。そのメールに返信をしようとした時、

またケータイが鳴った。今度は龍一からだ。

「都合ないからいいよ！あと集合時間教えてね～～」

オレはその二人のメールに返信をした。

「集合時間5時30分で！集合場所はいつもの場所だよ～」

いつもの場所というのは、公園の入り口の坂を上った所である。

「よし!勉強頑張るか～～！」

それからの6日間は自分にとって短く感じた。

8月23日、祭り当日だ。現在時刻は5時15分である。

オレはすっかり着替えも準備も終え、もういつでも行ける、という状況である。さあ行こう、と思った瞬間、

またあの写真が目に入った。

「お〜い」

ここはどこだろうか。あっ、龍一に呼び込まれた時だ。

「なんだよ急に」

オレがしゃべった。

「お前、あいつの事好きなんだろ」

「いやなに急に」

おれは笑いながら答えた。

「とぼけんなよ、あいつのこと好きなんだろ」

「まあそうだけど」

「ふ〜ん！ そうなんだ〜！ んなら早くコクっちゃえよ」

「何言ってるんだよ、するわけねえだろ」

「そんな事言っちゃって〜〜！」

気づくと現在に戻っていた。

やはり自分はいつのが好きなのだろうか。そんなことを思いつつ玄関に行き靴を履いた。

「宿題やってある〜？」

「やってあるよお〜」

「お金無駄遣いしないのよ〜」

「わかってるよ〜」

オレの母は心配性だということを今年の夏休みで何回

思ったことか。まあいいか。

「行ってきま〜す！」

「行ってらっしゃ〜い」

オレは玄関を出た。オレの住んでいるマンションは7階建てで、その7階に住んでいる。なので、いつもエレベーターで1階まで降りている。今日もいつも通りにエレベーターで降りようとしたが、エレベーターが来るのが遅かったので今回は階段で降りることにした。

夏祭りの場所までは、歩いて2分ほどの距離だ。

しばらく歩くと、もう着いた。人はまだ数人しかおらず、あの2人もまだいなかった。

時計の針は、5時25分を指した。

しばらくすると、奈美がやってきた。時刻は5時32分、ほぼ時間通りだ。

「お〜い」

先に声をかけたのは奈美の方だった。

「よお〜」

「ゴメン、ちょっと遅くなっちゃった」

「いや、そんなことねえよ。ほぼ時間通り。さっすが〜！」

「ハハハハハ!!」

二人で笑った。

「それより、龍一は？」

「知らん。遅いなあ・・・」

いつもの龍一なら集合時間に遅れないのだが、今日は珍しく遅い。

ケータイが鳴った。龍一からだ。

「ゴメン!!!用事ができて祭り行けなくなった!!!二人で楽しんどけ!せっかく二人なんだからコクっちゃいなよ!

んじゃ、健闘を祈るぜえ〜〜〜」

「何て〜？」

「えっ。あっ、何か龍一これなくなったって。」

「ふ〜ん。んじゃ今日は二人だね」

奈美の口から「二人」という言葉を発した瞬間、オレは一瞬ギクっとした。

「あっ、そっそうだね〜」

オレは苦笑いしながら言った。

「とりあえず店回ろっ！」

祭り会場には、少ないが屋台がいくつかある。焼きそばや、フライドポテト、たませんなどがある。

「まず、ドリンク買うでしょ〜！」

と言って、ドリンクを買いに行った。奈美はオレンジジュース、オレは三矢サイダーだ。三矢サイダーはオレの炭酸ドリンクの中でもっとも好きなものだ。プシュッ!、いい音。このフタを開けるときの炭酸を飲むときの楽しみだ。まだ数十分ほどしかたっていないのにもう人が多くなってきた。

まず一番最初に行ったのはたませんだ。たませんは祭りの一番の楽しみといえる。だが最近、ニュースで見たのだが、たませんはどうやら東海地方だけらしいのだ。

「こんなおいしい物が食えないなんて・・・」

などと思った。それから、フライドポテトや、中古の物ばかり扱っているサメ釣りや、その他いろいろな所にいつているうちに、もう6時35分になった。これが相対性理論というものか。しばらくすると、太鼓の音が聞こえてきた。盆踊りでもやっているのだろうか。

「あっ!盆踊りだ〜！」

奈美が真っ先に盆踊りのあるステージ周辺に走った。

自分は奈美に追いつこうと真っ先に後を追った。

奈美は、ステージ上で盆踊りを踊っている人を見ながら隣で楽しそうに踊っている。

「お前、あいつの事好きなんだろ。早くコクっちゃえよ!」

頭の中にその言葉がよぎった。

確かにオレはあいつ、というか奈美の事が好きだ。だが、こんな成績も普通でスポーツ力も普通で顔も普通なこのオレが、スポーツ優秀、成績優秀、顔優秀な奈美と付き合ってよいのだろうか。そんなことをあの言葉を言われてからずっと思っていた。だけど、このままでいいのか。黙っているより、自分の思いを伝えるのがいいのではないか。そんな風に自問自答していた。オレは決心した。

奈美にオレの思いを伝える。

そう自分の中で決心した。

隣にはもう奈美がいる。こういう時どうすればいいのか、

自分と闘っていた。ここはオレなりの方法で行こう。

オレは自分のだせる勇気を最大にふりしぼって、奈美の手にそっと手を寄せた。

「よし!」

オレは安心したように力を抜いた。果たして奈美にオレの思いは伝わったのだろうか。そんなモヤモヤが頭の中を埋め尽くしている。

「痛ッ!」

奈美が力強く手を握り返した。あいつこんな力持ってたっけ、と思い奈美の顔を見た。

「あれ?誰?」

顔を見ると見ず知らずのオカマがいた。なんだか優越そうにこちらを見ている。

「????????」

ふと我に返り手を離した。スイマセンスイマセンと謎のオカマに謝った。

奈美はどこだ。

あたりを見渡す。どこ行った、と思いながらずっと探していると、

いた!

ドリンク売り場の所だ。

「ちょっ、ちょっと待てよお~~~~~」

オレはこの時のガッカリさを今でもはっきりと覚えている。

この小説はフィクションで、実在する人物、場所とは全く関係ありません